校長研修だより１０９

それはズバリ「雑談」です

2023・6・14　重枝 一郎

不登校生や不登校をテーマにしたたくさんの人に取材経験のある，全国不登校新聞社代表理事の石井氏の話を紹介する。

石井氏自身も中２から不登校を経験している。火種は小５の時，親から進められて進学塾に入った時のこと。その塾は，スパルタ的で石井氏は落ちこぼれ的な扱いを受ける。石井氏が言うには，中学生の不登校の多くは，幼稚園，小学校の頃から火種がある場合が多いそうである。石井氏も，その塾で，勉強ができない人の末路はどうなるのかということを刷り込まれたことがその後に大きく影響したと言う。石井氏は，中学生になるまでに異変は出ていて，クリプトマニア（万引き）が始まっていた（２年間バレなかった。とった品物を家に持って帰るとバレるので捨てていた。つまり依存症である）。中学受験は第６志望まで全て落ちての中学校生活になる。植え付けられた「自分には能力がないから幸せになれない」という考えを引きずっていると，目の前にいる先生，目の前にいる友だちが全然違ったものに見えてしまった。そこから転げ落ちるように学校生活が苦しくなり不登校になったそうである。

文科省は，不登校に関する基本方針として，不登校を問題行動と判断してはいけないとしている。そして，個々に応じた必要な支援をしてほしいと言っている。しかし，現場としてはなかなかの無理難題と受け止められがちである。だから，現場には浸透しているとは言い難い。そこで文科省の２０１９年に出した通知は，子どもの状況を省みず学校復帰だけを目的とした対応を止めさせるために「過去の通知を廃止する」というものであった。

生徒が「学校に行きたくない」と言ったら，おそらく私たちは「どうして？」と言ってしまう。石井氏もクリプトマニアが始まったときは一度も学校休んでいない。でも，学校に行きたくないということはしょっちゅう言っていたそうである。基本，子どもはSOS を言葉で伝えない。だから「行きたくない」という言葉が出たときは，まずは**「わかった」**と言う。「わかった」と一言言ってあげたら，本人がずっと身体からSOS が出て辛かったのが，やっと報われた気持ちになる。NG ワードは，いきなりの「もう少し頑張ってみようか」と「どうして辛いの」である。「わかった」と一言言ってからであれば多少はいい。まずは安全確保してもらいたいのである。それでも，「わかった」とは言いにくいと思う。「学校に行きたくない」を「わかった」とは言いにくい。私たちは何かそれなりの理由を求めてしまう。しかし，一発勝負に出るのはよくないと言う。「わかった」が難しいなら，**「そうなんだ～」**といった**生返事**でもいい。

生返事したとしても，休むことは認めることになる。それを認めたときにどれくらい休ませるのがいいのかと悩む。基本休む期間は風邪と同じくらいが目安となる。１ヶ月になると初期対応としてはよくない。まずは「今日は休もう」でいい。

不登校になる前に私たちに何ができるか。それを「課題予防的指導」という（校長研修だより７５号「改訂生徒指導提要」参照）。それは具体的にどんな取り組みになるのか。石井氏もしかり，多くの実践者が言うのが，**「雑談すること」**である。そして**「息抜き」**させることである。昨今，生徒の中には孤立している生徒が多い。なんとわざわ

ざ「私，友だちと雑談できたよ」と報告するほどである。親も先生も忙しそうで話せない。友だちに対しても防衛が働いて自意識過剰になる。単純な話がしづらいのである。誰かと何でもない話をしたいのである。

ずばり，不登校防止予防のキーワードは**「雑談」**である。

チャイルドラインという電話相談のことはみなさん知っていると思う。年間何十万件の子どもが電話してくる。その相談内容のトップ３はここ１０年間くらい変わっていないそうである。１位は「人間関係」になる。いじめ問題とかもあるが，親にも先生にも誰にも言いにくいとなれば，性の悩みが多い。３番目に入ってくるのがこの**「雑談」**である。今日あったことなどを５分くらい話す場合が多いそうである。この**「雑談」**はメディアも取り上げないのであまり知られていない。このたった５分を身近な身内（親，きょうだい），準身内（友だち，教師）で雑談出来たらいい。

私たちの職員室でもきっと同じである。**「雑談」**はいろんなことの**「課題予防的」**になっていることは多い。だから不登校予防についても腑に落ちる。
生徒と**「雑談」**する。**生徒から「雑談」したい人と思われるか。**そのために私たちは生徒からどんな見られ方をすることが大事であるかを考えなくてはならない。